

公立阿伎留医療センター創設100周年 1世紀に渡り住民の命と健康を守る

良質の医療を実践し、地域医療の最適化に努力

公立阿伎留医療センター(根東義明企業長・院長、あきる野市引田)が今年、企業団(組合)創設100年を迎えた。1世紀に渡り、秋川流域の基幹病院として地域医療に貢献、住民の命と健康を守ってきた。2年後には病院開院100年になる。同医療センターは現在、100年の発展を土台に、新たな改革プラン(経営強化プラン)の策定を進めており、持続可能な地域医療提供体制の確保に努力していく。

(岡村信良)

1923(大正12)

明治時代から大正時

同等の5類に引き下げ

年6月9日、当時の西秋留村、多西村、平井村、増戸村、五日市町の5町村が「西秋留村外四ヶ町村病院組合」を設立し、東京府より設置許可を受けた。初代管理者には西秋留村長の瀬沼利氏氏が就任。24(大正13)年12月21日、西秋留村引田字阿伎野13番地に伝染病院を建設し、落成式を挙げた。25(大正14)年4月10日、伝染病床21床を備えた同医療センターの前身、単独伝染病院が開院した。初代院長には東京府立駒込病院から犬塚道夫氏が赴任した。

33(昭和8)年11月3日には東秋留村と大久野村が組合に加入。これを契機に組合の名称を「阿伎留病院組合」に改めた。

同等の5類に引き下げられ、コロナ対応は出口を迎えた。同医療センターは、ドライブスルー方式によるPCR検査センターと発熱外来に対応、軽症・中等症対象の感染症専用病棟を設置し、新型コロナウイルス患者を受け入れ、奮闘した。地域の新型コロナウイルス感染症患者受入の需要がある限り受け入れ、地域との繋がりを強化し、地域へ安心感を届ける公立病院の使命を果たしたことは、伝染病蔓延に警鐘を鳴らし、多くの命を救おうと創設、開院に至った同医療センターの原点に通じるものだった。

されるように、政治や文化の面で大きな変化を遂げた時代だった。一方で、第1次世界大戦(1914~1918年)後の不況のなか、23年9月1日には死者が10万人を超えた関東大震災に見舞われるなど混乱の時代でもあった。

同医療センターは戦後、秋川流域の発展を追求するように病院としての役割を変え、規模を拡大。52(昭和27)

年は一般6床、結核114床、伝染55床だったが、69(昭和44)年は一般140床、結核56床、伝染34床になった。70(昭和45)年に医療施設・設備の改善のため3カ年計画に基づき新病院建設に着手。併せて秋多町引田78番地の新病院に移転し、診療業務を開始した。73(昭和48)年に防音改築第3期工事を完了。同年、「総合病院」の承認を受けた。

この間、95(平成7)年にMRI(1.5テスラ)を、96(平成8)年にコンピュータド・ラジオグラフィ(CR)と高速らせ

ん型全身用CTスキャナーを相次いで導入。97(平成9)年には多目的血管撮影装置を新設、X線テレビ装置の増設を行うなど先端医療機器の充実を図ってきた。

新病棟をオープン後も、緩和ケア病棟の開院、院内助産所及び助産師外来の開院、消化器病センターの開院、回復期リハビリテーション病棟の開院、地域包括ケア病棟の開院などに取り組み、西多摩の中核医療施設としての機能強化に努めてきた。2013(平成25)年には阿伎留病院企業団に組織変更した。

また、15(平成27)年、財団法人日本医療機能評価機構から病院機能評価(3rdG:Ver.1.1)

社会の進展、最適な医療を目指す中で、その後も増改築を繰り返してきたが、99(平成11)年、公立阿伎留病院建設検討委員会を設置。2004(平成16)年に公立阿伎留病院建設工事に着手。06年(平成18)年、建設工事が竣工した。病院の名称を現在の公立阿伎留医療センターに改めた。

みやすく信頼される病院であって欲しいと、市民有志が「公立阿伎留医療センターを育てる会」を立ち上げた。法人会員、一般会員を募り、センターの療養環境の整備や社会啓発活動などを通じ、公立阿伎留医療センターの発展を陰ながら支援している。

同医療センターは3万2211平方メートル敷地に、本館(地上6階地下1階)、別館(地上2階)、多目的棟(地上2階)が建つ。延床面積は計2万8035平方メートルになる。

診療科目は、内科、神経内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、腎臓内科、リウマチ科、小児科、外科、乳腺外科、呼吸器外科、整形外科、脳神

経外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科、歯科口腔外科の計22科を備える。このほか、院内標榜科目として、総合内科、生活習慣病内科、救急科、緩和治療科がある。病床数は305床。1日平均の患者数は外来579人、入院158人、平均在院日数は12日になる(令和4年度)。

22(令和4)年、患者よし、世間よし、病院よしの「三方よし」の医療哲学を実践した荒川泰行企業長の後任として根東義明企業長が就任。最新のデジタル・トランスフォーメーション(DX)時代に積極的に対応するなど良質の医療の実践に邁進。併せて、「公立病院経営強化プラン」策定に取り組み、持続可能な地域医療提供体制の確保に全力を挙げ

る。25(令和7)年の開院100年の前年には、高精度ながん放射線治療が可能になる医療装置「MRリニアックシステム」を導入し、治療体制の拡充を図っていく。



一般病院2(200)499床(主たる機能)、緩和ケア病院(副機能)の認定を受けた。10(平成22)年には地域住民にとつて親しみやすく信頼される病院であって欲しいと、市民有志が「公立阿伎留医療センターを育てる会」を立ち上げた。法人会員、一般会員を募り、センターの療養環境の整備や社会啓発活動などを通じ、公立阿伎留医療センターの発展を陰ながら支援している。